

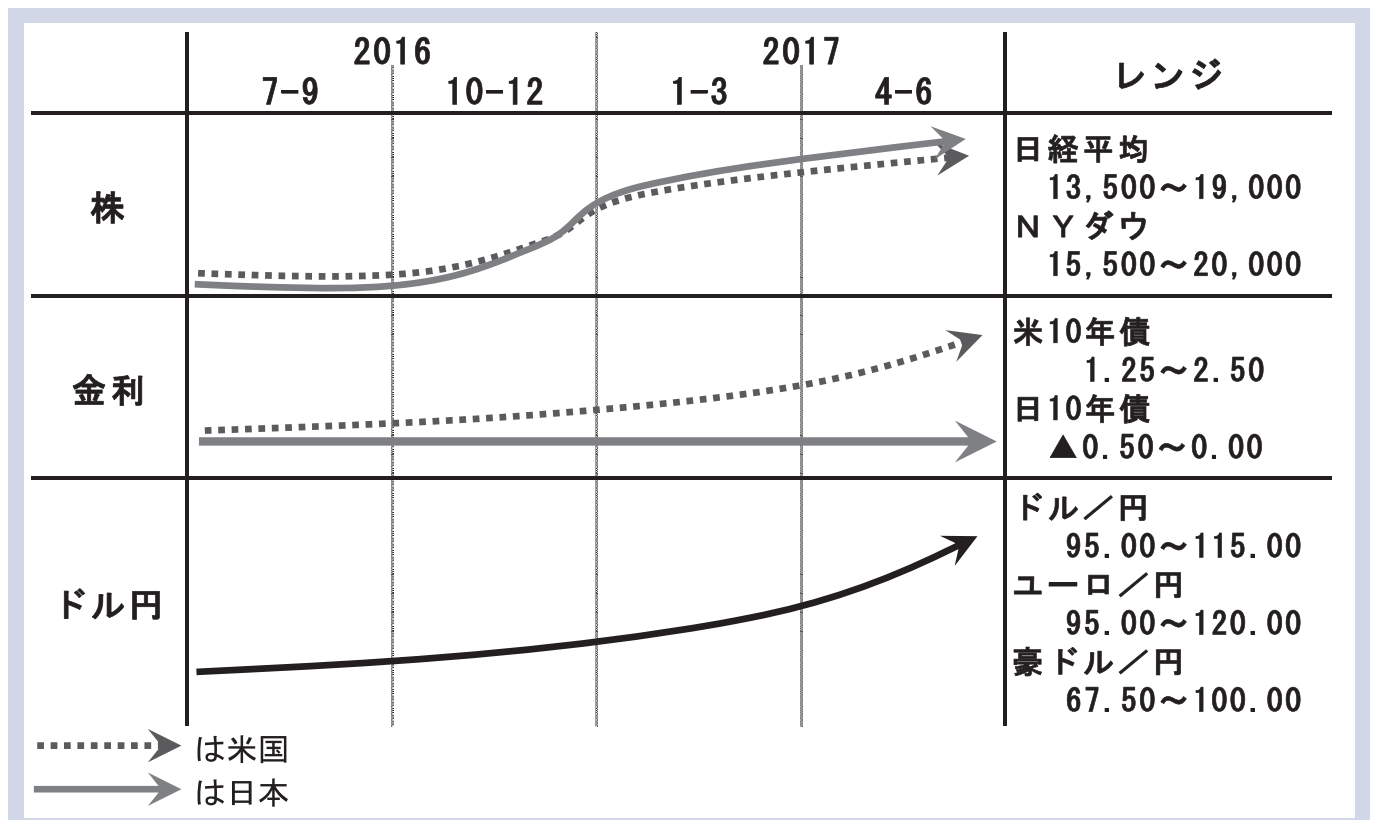
# 各国経済の6ヶ月見通しと向こう1年間の市場予想

(7月5日時点)

## I. 各国経済の6ヶ月見通し

	コメント
① 日本	景気は足元で踊り場状態にあるが、先行きも停滞感が残るだろう。①海外経済の回復ペースが緩やかなものにとどまること、②所得の回復が限定的なこと、から景気回復力は脆弱。円高・株安による企業収益下押しや先行き不透明感の強まりも景気抑制要因になるだろう。景気は回復感に欠ける展開が予想される。
② 米国	米国経済は、ドル高、世界経済減速等の影響を受けるものの、雇用・所得の増加、資産残高の増加、借り入れ環境の改善等を背景とした個人消費の拡大や住宅市場の回復の持続によって景気回復が続こう。原油価格の上昇による鉱業部門での投資の落ち込みの緩和等も成長を支え、米景気は堅調に推移すると予想される。
③ 欧州	ユーロ圏経済は、①一連の金融緩和の効果浸透、②雇用・所得環境の持ち直し、③財政緊縮ペースの緩和を背景に、緩やかな成長ペースを持続する公算が大きい。ただし、英国の欧州連合(EU)離脱を巡る不透明感の高まりから、今後、景気にブレーキが掛かることが予想される。この間、物価の上昇圧力は引き続き緩慢で、原油安によるエネルギー価格の下押し圧力が緩和するものの、低インフレ基調が続く可能性が高い。
④ アジア・新興国	アジア経済・新興国では、中国景気が足踏みを続けるなか、この動きに足を引っ張られる可能性は残る。英国のEU離脱を巡る国際金融市場の混乱が資金流出を招くリスクはある一方、世界的な金融緩和を背景に流動性相場の様相を呈するなか、利回りを求める資金流入が景気を押し上げる可能性もある。ただし、先行きについても外部環境に揺さぶられやすい展開となることで、不安定な状況は続くと予想される。

## 向こう1年間の市場予想イメージとレンジ



(注)記載された内容は、第一生命ないしはその関連会社の投資方針と常に整合的であるとは限りません。